

文法的操作による

古典作品解釈への接近

——徒然草第一六七段を資料として——

森 川 崇

作品を通読し直感によってある種のイメージを得る。このことは、作品解釈にあたって大前提となることである。作品の主題・構想・叙述を関連的に、立体的に追跡することによって、最初のイメージをより明確なものにしていくという一つの方法をここに試みる。まず、各文の内部における「ことば」の機

能や、「文の成分」の関係を分析し、おのこの文の内容（素材程度の意味で、作品全体から帰納される含蓄のある内容のことではない）をつかむ。

次には、文章（作品）の構成要素として「文」を再検討する。さらに、各文間の関係を分析し、それを種々な観点から総合してい

く操作によって、作品の構想をとらえ、主題に迫ろうとするのである。つまり、文の連接関係や、各文の勢力関係などの分析操作によって、文脈をはっきりさせ、素材がどんな形で生かされ、いかなる意味作用を発揮しているかを考えるのである。この際、文章のキーワードが浮かびあがってきはしないか、という期待がもてる。分析したものを、何らかの形に総合してみれば、文章の頂点に位置する文（中心文）が浮かびあがってくるであろう。そして、前述のキー・ワードを加味することによって、その文章（作品）の主題に少しでも近づくことができるのではないかと考えるのである。

分析作業の手がかりとして特に注意したい文法上のことからは、「接続語」「指示語」「文末部のことば」などが主となる。そのほか、「文の中での強調表現」「文の連接においてくり返されることば」なども注目したいことがらである。

文末部では、表現者の文表現をそこで一位として統括する働きがなされるのが普通である。

指示語は、先行の「文」や「文群」の内容をうけて、それを発展的に述べようとする

きによく用いられるものである。

接続語は、文脈の屈折に直接関係するものである。

文の内部での強調表現は、表現者の、素材に対する焦点化を果たすものとして受けとることができ。

文の連接においてくり返されることばは、指示語や強調表現と同様の意味をもち、文脈追跡に主要な手がかりとなる。

このような観点から、前記五つのことばを特に注目するのである。

△本文▽

一道に携はる人、あらぬ道の席に臨みて「あはれ、わが道ならましかば、かくよそ

(注一)

主述

が主述関係をあらわす。



は補える主部(表現されていない主部)を示す。

(…) は補ったことばである。

に見侍らしものを」といひ、心にも思へること常のことなれど、よにわろく覚ゆるなり。知らぬ道の、羨しく覚えば、「あな羨し、なか智はざりけん」といひてありなり。

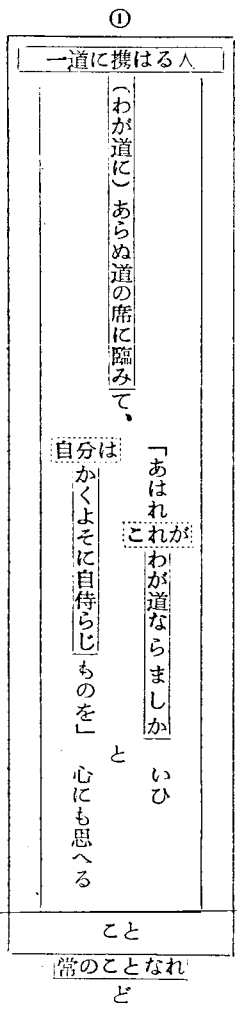
わが智をとり出でて、人に争ふは、角あるものの角をかたおけ、牙あるものの牙をかみいだすたくひなり。人としては善に誇らず、物と争はざるを徳とす。他にまさることのあるは大なる失なり。品の高さにて

も、才芸の勝れたるにても、先祖の誉にても、人にまされりと思へる人は、たとひ言葉に出でてこそ言はねども、内心にそこはくの料あり。慎みてこれを忘るべし。をこ

にも見え、人にもいひ消たれ、禍をも捫くは、ただこの慢心なり。一道にもまことに長じぬる人は、みづから明らかにその非を知るゆゑに志常に満たずして、終に物に誇ることなし。

△徒然草第一六七段▽

まず、文の成分関係を分析し、補うべきものは補うようにして、一文ごとの内容をつかむのである。一つ一つの説明を筆にすることは非常なスペースを必要とするゆゑ、「文の成分」の関係を、各文ごとに、次のように図解することにする。なお、各文には、便宜上表現された順序にしたがって番号を施すことにする。



① わたくしは
(それを) 世にわろく覚ゆるなり
断定。

② わたくしたちは
自分知らぬ道の羨しく思へば
「あな羨し
自分などか習はざりけん
といひてありなん」
希望

③ わが智をとりいでて人に争ふは
角あるもの 角をかたぶけ
角あるもの 牙をかみいだす
たくひなり
断定。

④ 人としては
善に誇らず
物と争はざる
を徳とす

⑤ 他にまさることのあるは
大なる失なり
断定。

上図のように、各文の構造を分解することによって、各文の内容をつかむことができ。もちろんここでは、語い上の知識のあることが前提となっているのであるが。

次に文章(作品)の構成要素として、各文を再検討する。この際に注意すべき文法的事とがらが、「接統語」「指示語」「文末部のことば」などであることは先にも述べたとおりである。

① 一道に携はる人……よにわろく覚ゆるなり
「人が「あはれ、わが道ならましければ、かくよそに見待らじものを」といひ、心にも思へること」に対して、「わろく覚ゆる」という作者の感想を、断定の助動詞「なり」で述べている。

② 知らぬ道のうらやましく覚えは……といひてありなん。
「……と言っていたい」という、人間としての態度について、作者の希望を、助動詞「な」「ん」であらわしている。

③ わが智をとり出でて人に争ふは……たくひなり。
「わが智をとり出でて人に争ふは……牙あるもの牙をかみいだすたくひ」であると作者の論断を、助動詞「なり」であらわして

⑥ 品の高さにてても
才芸の勝れたるにても分は人にまされりと思へる人は
先祖の誉にても自

たとひことばに
出でてこそいはね

ども内心にそこばくの科あり

⑦ 命令
慎みてこれを忘るべし

⑧ をこにも見え
人にもいひ消たれ(の)は
禍をも招く

断定
ただこの慢心なり

⑨ ことに
も人も
道にじめ
長

みづから明らかにその非を知る

ゆゑに、志常に満たずして終に物に誇ることなし

いる。

④ 人としては……を徳とす。

「善に誇らず、物と争はざるを徳」とみなす、という、作者の「徳」に対する論断を、動詞「す」であらわしている。

⑤ 他にまさることのあるは大なる失なり。

「他にまさることのあるのは、大なる失」

である。と、作者の論断を、助動詞「なり」であらわしている。

⑥ 品の高さにても……たとひことばにいでてこそいはねども、……そこばくの科あり。

「人にまされりと思へる人は、たとひことばにいでてこそいはねども、内心にそこばく

の科」がある、という、作者の判断を、動詞「あり」で述べている。「たとひ……こそいはねども」の強調表現に注目を要する。

⑦ 慎みてこれを忘るべし。

「これ」は、⑥に述べられた「人にまされりと思へる」ことをうけ、それを「忘れねばならない。忘れよ」という、作者の命令的態

度が、助動詞「べし」に託されている。

⑧をここにも見え……は、ただこの慢心なり。

「この」が、⑦⑥⑤④の内容を包含し、ここで、それらを抽象して、「慢心」の一語にしている。「慢心」が禍をも招くんだ、という強い論断が、副詞「ただ」と指示語「この」と、断定の助動詞「なり」に託されている。

⑨一道にもまことに長じぬる人は、……終に物に誇ることなし。

「一道にもまことに長じぬる人は」終生「物に誇ること」がない、という、作者の断定が、形容詞「なし」によってあらわされている。「なし」は、動詞「あり」の逆の意味作用を發揮しているから、形容詞といっても、作者の判断論述をしているのである。

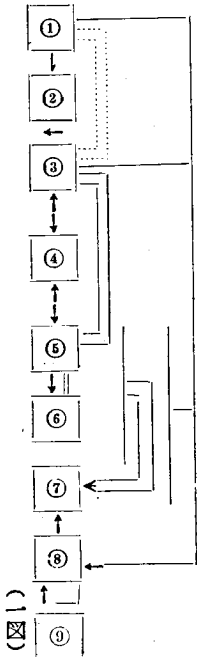
こうして、文章の構成要素として、全体の立場から「文」とみていけば、次のような事実に気がつくのである。

一、九文とも、文末が作者の断定・判断・意志をあらわすことば、——「なり」「なし」「あり」「べし」「なし」——で結ばれている。

二、時間に関係のある助動詞がつかわれていないこと。これは、「時」と関係のない、

超時間的な場で論述がおこなわれていることを意味する。

三、また、⑧に述べられた「ただこの慢心なり」の「慢心」が、この文章のキー・ワードであること。なぜなら、⑧の所で説明したように、「この」が⑦⑥⑤④の内容を包含し、それらを抽象したものが、この「慢心」となっているからである。



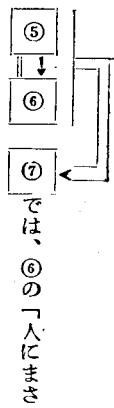
① ↓ ② の関係は①の「あらぬ道」を、
 ②で「知らぬ道」とうけて、文を続けている。
 ② ← ③ では、②から話題をかえて、③の文をおこしている。
 ③ ↑ ④ では、③の「わが智をとり出でて人に争ふ」を、④の文中で「物と争はざる」とうけることにより、対比・対立の関係があらわれている。
 ④ ↓ ⑤ では、④の文中の「徳」に

ここで、この文章が、「慢心」を論の中心とする論説文であることを確認できたのである。

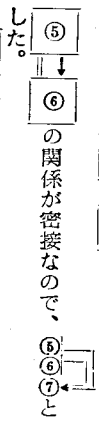
ここで、この文章の文脈を追跡してみよう。文章の構造を分析してみよう。文と文との連接関係を着目して図解すれば、第一図のようになる。

対して、⑤の文中で「失」と示すことにより、対比・対立の関係があらわれている。
 ③ ↑ ④ ↑ ⑤ では、③の比喩表現を解いて、⑤の文で卒直に説明・論述したものであるから、③と⑤が同格の関係にあることを示す。

⑤ ↓ ⑥ では、⑥の文章を⑥で例示しながら論を展開しているから、同格と展開という二つの関係をもっていると考える。



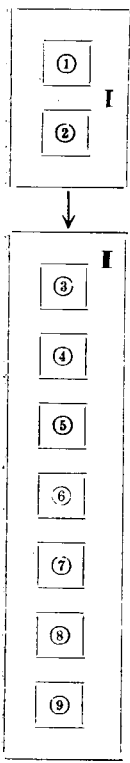
れりと思へる」を、⑦の文中で指示語「これ」でうけている。しかも、⑥に対して、⑦では、「忘るべし」と結論を出しているのである。直接には⑥→⑦なのであるが、



⑦の文意に対して、⑧の文で理由を補足的に説明している。

⑧では、⑧に対して反対のことがらを⑨の文であらわしているのである。

この文章は二つの段落から構成されているように編纂されているが、この段落と段落との関係についても触れておこう。



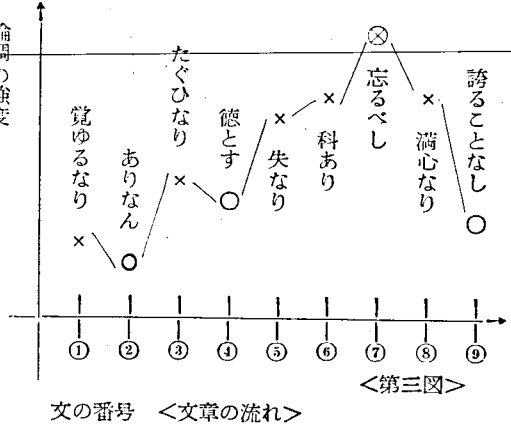
第Ⅰ段落は、問題の提示であり、第Ⅱ段落は、その発展・展開をはかり、結論づけたものなのである。

では、「慢心」が、各文でどんな角度から述べられているか、もう一度各文の内容をふりかえてみよう。

①③⑤⑥⑦⑧では、「慢心が否定されるべきもの」という角度から論じられている。逆に、②④⑦⑨は、「慢心のないがよい」とする角度から述べられた文であることがわかる。

さらに、作者の論調の強度と、文章の流れに潜目して、①から⑨までの文の連なりを、第三図のグラフのように図式化することによって、さらには、第一図の文章構造の分析図を参照することによって、この文章の姿を全体的にながめてみると、⑦の文がこの文章の頂点に位置していることがわかる。すなわ

ち、⑦「慎みてこれを忘るべし」が中心文なのである。ここで第三図について説明しなければならぬ。



○は「満心を非とする文」
 ×は「満心を非とする文」

このグラフは、横軸に文章の流れ（文の番号）をとり縦軸に作者の論調の強度、いいかえれば、読者に訴える力の強度を示したものである。

である。折れ線グラフが文章の流勢の変化をあらわすようにしている。なお、縦軸の高低の判定は、文末部のことばの機能を中心として、文中の強調表現や内容をも加味しておこなった。

①「覚ゆるなり」は、断定の助動詞「なり」で作者の論断をあらわしてはいるが、「覚ゆる」につけられて、作者の感想の断定となり、論調としては弱いものとなっている。

②「ありなん」は、作者の「希望」であるから、これも論断としては弱いものである。

③は、「たくひなり」と断定の助動詞「なり」ではっきりと論断しているから、①②と比較して、論調は強いといえる。

④「徳とす」は、「なり」の断定にくらべれば、やや弱い論調というべきである。

⑤「失なり」は、③「たくひなり」と同じ形の論断ではあるが、③「たくひなり」が、比喩を用いたやや強まわしな論断であるのに対して、⑤は③よりも強い論調の文であるといえる。

⑥「科あり」は⑤「失なり」よりもいっそう強い内容の論調である。

⑦「忘るべし」は、「べし」という命令の

表現を用いることによって、読者に対して最も強い訴えかけをしたものである。さらに、「忘る」ということが、読者の心で直接作用するものであることも加味すれば、論調としては、非常に強いものといえるのである。

⑧「ただこの慢心なり」では、③「たくひなり」、⑤「失なり」と同じ形の論断ではあるが、「ただ」、「この」など、「慢心」を強調することは働いているので、前者③⑤よりも強い論調といえることができる。

⑨「終に物に誇ることなし」で「なし」は形容詞とはいえ、機能は動詞「あり」とかわりない。したがって、論断の形は⑥「科あり」と同様と考えることができる。しかし、⑥が文の内部での強調表現「たとひ……こそいへども」によって、「科あり」の論断を強めているのに対して、⑨ではそれ程の強調がなされていない。内容としても軽いものである。よって、⑥よりも論調は弱いということになる。

以上の操作から、この文章の主題は、「慢心を捨てよ。謙虚であれ」という教訓であることを知るのである。

しかも、②④⑨にあらわされた「慢心のな

いのをよい」とする角度からの論調が、②⑤⑥⑧の「慢心を否定する」角度からの論調よりもやや弱いことを考えあわせると、この文章の作者自身が、慢心のない境地にあらがれてはいるのだけれども、まだ「慢心を捨て去った境地に達していないのではないか」と想像することができるのである。

作品の解釈に到達するためには、作品をめぐる種々な考証や、いろいろな条件をも究明していかなければならない。

わたくしが、標題に「解釈への接近」としたのも、解釈への遠い道に、一歩でも近く進むことのできる方法を考えたからである。理論的な裏づけをもった解釈作業の方法として、文法的な操作を、原理的に体系づけられはしないか、と期待したからなのである。

今回発表したものは、まだまだ試案の域を出ないものである。
(本学四年)